ルニタラズ、ソノ實ハ殼赤色ニシテ黑子アリテ、美ナルコト花ニマサレリ、深山ニ多シ、俗ニクサボタント云、信州ニテヤマシャクジャウト云、備後ニテノシャクヤクト云、和州宇陀ニテ此根ヲ栽ヘ培養シタルヲ、宇陀芍藥ト云、粗皮ヲ去リ曝乾シタルモノナリ、外白色切レバ內ニ黑キ輪アリ、味酸シ、又信州ニテ培養シテ出スヲ、信濃芍藥ト云フ、又丹波伊勢ヨリ山生ヲ取、直ニ乾シタルヲ出ス、コレヲ田舍芍藥ト云、最下品ナリ、

〔廣益地錦抄、四〕芍藥　ゑやくやくは花相といふて、ぼたんに次り、はなに數百の品有て、二階三かいあり、金銀のもやうあるゆへ、金ゑで、銀ゑで、金手まり、砂金蓋などゝみな金銀の名あり、藥種の芍藥は各別の物なり、葉形草立も少似てちがひあり、花ハひとへ小りん川骨の花のごとくにて天をむきてひらく、ながめにたらず、秋實をむすぶ、其實われて三方四方へわかれ、內は皆朱にぬるがごとくに赤く、花よりまさりて見るにたれり、紅白の二種有り、紅の根は赤芍、白は白芍なり、

〔剪花翁傳三四月開花〕芍藥花　花白淡紅、濃紅、紅白斑入等品數多し、開花四月中旬、方日向、地中濕、土回塵、肥大便、寒中芽出るまへ、淡小便そゝぐべし、分株、移秋、彼岸よし、上品なるを俗にまがきといふ、藥大總にして亂れず、葩直く連りて、英皿のごとく、辰の刻より開き、未の刻に葩收て藥を掩ひ包む、翌日も開くこと昨日のごとし、是のごとくなる事、四五日におよぶ也、下品なるものを、俗に呼て踊子といふ、乃ち開きしまゝにて次第にゑぼむ也、

〔農業全書十藥種之類〕芍藥

芍藥は牡丹に相つぎ、和漢古今ともに、世人花を賞するものなり、殊さら近來都鄙其花を弄ぶ事さかんにして、年を追て其花ゑなゝ多くなれる事いふばかりなし、藥種には花の一重なるを用ゆ、白を白芍藥と云、赤を赤芍藥といふ、醫家に白芍藥を多く用ひ、赤は只十にして二三も用ゆ